



SDGs未来都市
TOYAMA
富山市PTA連絡協議会は
富山市SDGsサポーター
に登録しております

事業報告は
こちらから
ご覧ください

市P連
HP



富山市PTA連絡協議会広報紙 第114号

教育子育てに関する要望書提出・富山市小・中学校長会との懇談会 1P
特集 「未来へつなぐ富山市の教育」～その中核をなす「三本の矢」～ 2-4P
 子育てサロン・PTA活動研修会 5P
 委員会活動紹介 6P

教育子育てに関する要望書提出 (教育子育て研究委員会)



令和7年1月20日(火)富山市役所にて、藤井裕久市長、宮口克志教育長へ「令和7年度教育子育てに関する要望書」を提出しました。

「学校運営体制の充実と教員支援」、「子どもの力を伸ばす学びと体験の推進」、「快適で安全な教育環境の整備」、「家庭・地域と連携した子育て支援の充実」などを取りまとめ、藤井市長からは、教育・子育てを今日的な重要課題として捉え、現在取り組んでいる施策の内容や進行状況について、要望一つひとつに丁寧なご意見をいただきました。今後の教育・子育て施策につなげていく重要な機会となりました。



未来へつなぐ 富山市の教育

～その中核をなす「三本の矢」～

交えながら、お話を進めていければと思います。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

石田会長、ありがとうございます
た。宮口教育長より、富山市の教育の全体的な取り組みについてお話しさせていただきます。

宮口教育長 日頃より富山市の教育行政にご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。本日は「未来へつなぐ富山市の教育」について、改めてご説明申し上げます。現在、私たちは「三本の矢」として、教育施策を推進しています。1本目の矢は「主体性のある子どもの育成」です。これまでの教育は「先生が教え、子どもが教わる」という受け身の学びが中心でした。しかし、これからの時代はそれでは通用しません。AIの進化、気候変動、産業構造の変化、国際情勢の不安定化など、変化の激しいVUCA（ブーカ）の時代——変動性・不確実性・複雑性・曖昧性——を私たちは生きています。

こうした時代に必要なのは、「教わったことしかできない子」ではなく、「自ら考え、行動できる子ども」です。「主体性のある子どもの育成」とは、知識や技能の習得だけでなく、意欲・協調性・思いやり・粘り強さといった非認知能力を育むことでもあります。その代表が「主体性」です。

また、問題解決的な学習の充実、探究活動、インクルーシブ教育、ICT(GIGA)

スクール構想)の活用なども、この目的に直結しています。

すべての子どもたちに、学びの中で「自分で考え、選り、行動する経験」を積み重ねることが、今後の教育の柱となります。

オランダ発祥の「イエナプラン教育」では、「すべての人はユニークである(かけがえのない存在である)」という考え方を重視しています。富山市では、この理念を取り入れた「富山市版イエナプラン教育」または「イエナプラン的教育」を進めています。

一人ひとりの個性や考えを尊重する教育を通して、子どもたちの主体性や自己肯定感を育むことを目的としています。

主体性を育てるためには、まず教員自身の意識改革が欠かせません。二方向的に「教える授業」から、子どもの発想やつまりぎを大切に、「対話的な授業」へと転換していきます。例えば、算数の授業で「4+3=7」の式になるお話を作りましょう」という課題が出されたとき、ある子が「チューリップが4本咲いていて、アヒルが3羽池に入ろうとしています」と答えました。そのときに「それは足し算にならないから違う」と否定するのではなく、「なぜそう考えたのか」を掘り下げ、考えの多様性を大切に——そうした姿勢こそが主体性を伸ばす教育です。

先生が決めた「正解」に子どもを合わせるのではなく、子どもの発想を出发点にした学びを広げていくことを、私たちは教育の本質として大切にしています。

2本目の矢は「多様な学びの場の提供」です。

富山市では、一定規模の学級を確保することで、学習活動部活動合唱

などの教育的体験が十分に行えるよう、学校再編を進めています。

一方で、大きな集団が苦手な子どもたちのために、特認校制度の活用や、不登校児童生徒のための「校内サポートルーム」設置など、多様な居場所づくりも推進しています。

令和7年度には、旧浜黒崎小学校の校舎を活用した「学びの多様な学校(古志はるかぜ学園)」を開校する予定です。また、医療的ケア児の学びを支援するため、看護師を配置し、受け入れ体制の整備も進めています。

3本目の矢は「保護者や地域との協働」です。

令和5年度から、八尾中学校を除くすべての市立小中学校でコミュニティスクールが導入されました。地域とともに学校運営を行い、食育体験や地域連携型部活動などを進めています。

休日の部活動地域移行についても、令和8年度からは中学3年生の引退後、土日は基本的に活動しない方向で検討を進めています。その代わりに、子どもたちが自らの興味に応じて学びや活動を深める時間として活用できるように支援してまいります。

また、市教育委員会としても、広報誌やYoutubeなどを活用して教育に対する理解促進と情報発信を積極的に行っています。

教育基本法第1条には「人格の完成」第5条には「自立的に生きる基礎を培う」とあります。つまり、知識・技能の習得だけでなく、非認知能力——意欲、協調性、思いやり——など、人間としての力を育むことが教育の本質です。

富山市では、国の方針を受け身でなぞるのではなく、「子どもを育てるとは何か」「教育とはどうあるべきか」とい

う根本に立ち返り、本質的な教育を市全体で探求してまいります。

宮口教育長、ありがとうございます

**「未来へつなぐ富山市の教育」
—中学校現場の取り組み**

宮口教育長

竹脇中学校長 私からは、「未来へつなぐ富山市の教育」の三本の矢について、中学校現場の実践と歩みをご紹介いたします。

まず1本目の矢、「主体性のある子どもの育成」についてです。

現行の学習指導要領は施行から5年を迎えました。その中で、個別最適な学びと協働的な学びの体化、すなわち「主体的・対話的で深い学び」を推進することが求められています。この理念のもと、中学校長会では昨年度より「授業力の向上」を学校経営の中核に据え、教員の授業改善と意識改革を重点的に進めてまいりました。

昨年度は、宮口教育長をはじめ教育委員会の皆様から、学校ごとの授業改善に関する出前講義を実施していただきました。また、校長会の研修会では、大学教授を講師に迎え、「授業改善を推進する管理職の役割」についてオンラインで学ぶ機会も設けました。

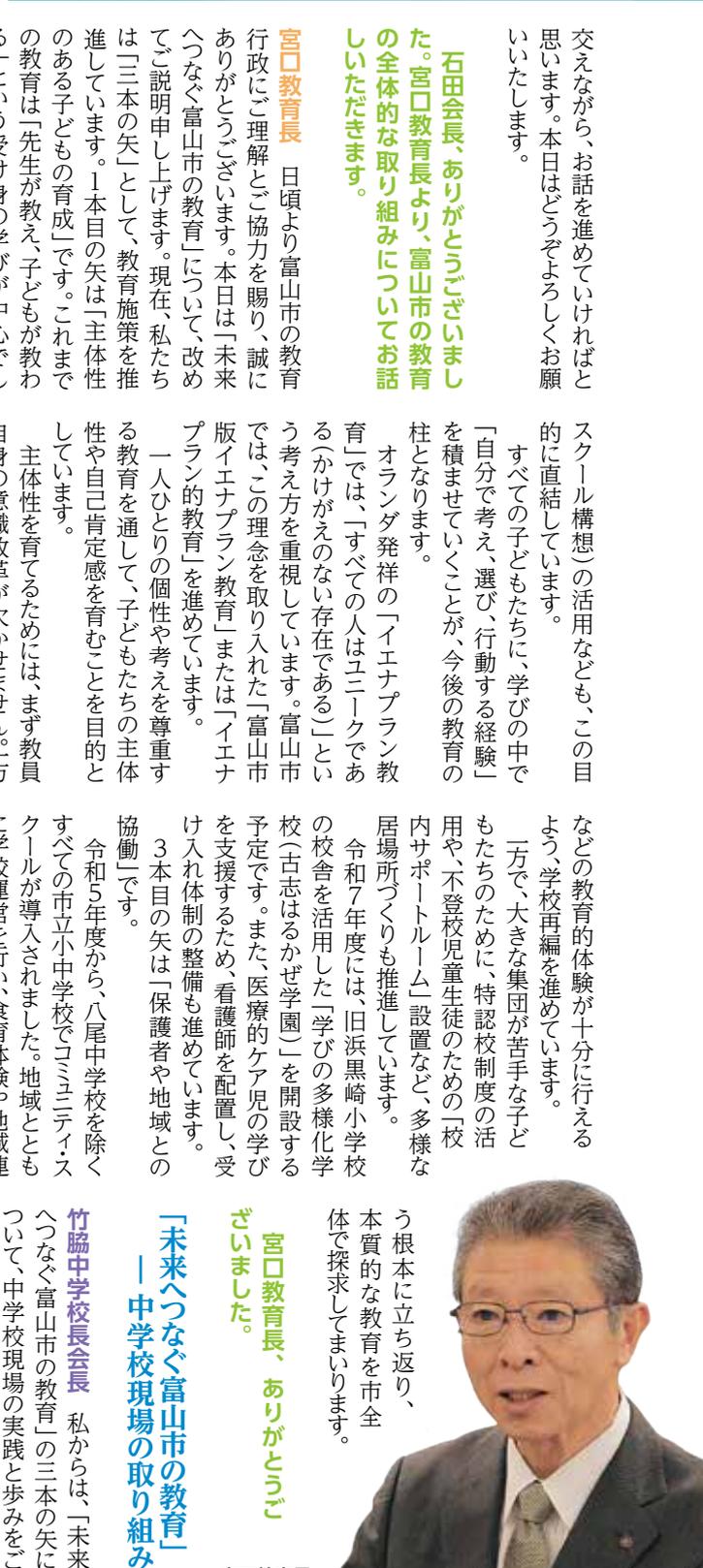
こうした取り組みを通じて、校長間で、「授業改善によって、子どもも教員もともに成長する学校をつくらう」と

石田会長 本日はお忙しい中お集まりいただき、ありがとうございます。「未来へつなぐ富山市の教育」の全体像、特にその中核をなす「三本の矢」——

1. 主体性のある子どもの育成の推進
2. 多様な学びの場の提供
3. 保護者や地域との協働

この取り組みをより多くの保護者や市民の皆さまに知っていただきたいと考え、教育長の思い、そしてそれを受けて小・中学校の現場でどのように実践されているのかを広くお届けしたいと思い、今回の座談会を企画いたしました。忌憚のないご意見を

石田会長



いう意識の共有が進んでいます。

今年度からは、新たに「拠点校型研修」が始まりました。市内を4つのブロックに分け、それぞれに拠点校(中学校)を設定。公開授業と研究協議を通して、教員の授業力向上を図っています。この研修の特徴は、小中学校の壁を越えて交流が行われている点です。たとえば、中学校の先生が小学校の授業を参観し、「子どもの学び方の中に主体性を見出すことが大切だ」といった意見を交わすなど、双方の学び合いが生まれています。

参加教員からは次のような声が寄せられています。「これまで、課題を与え、子どもが自ら学び方を選ぶことが、子どもが自ら学び方を選ばれていたが、子どもが主体的な学びであると気づかされた。」また、校長自らが研修会に足を運び、現場を確認する姿勢も広がっています。こうした積み重ねにより、富山市全体で「主体性を育む授業づくり」の機運が高まっています。

次に、2本目の矢「多様な学びの場の提供」についてです。不登校児童生徒への支援として、昨年度は9校に設置された校内サポートルームが、今年度は21校へと拡充されました。教室で過ごす子どもたちも、安心して学び、心を整えられる居場所として活用されています。給食をサポートルームで再開できた子、登校できる時間が少しずつ増えてきた子など、着実に効果が表れています。以前の「適応指導教室」は学習中心の環境でしたが、

現在のサポートルームは、子どもが自分のやりたいことを選び、心を癒しな

がエネルギーを蓄える場所が変わっています。教育長が実際に配置校を訪問し、管理職や支援員に直接理念を伝えてくださったこと、また、バランスボールやハンモックなどを設置する環境整備の支援をいただいたことが、この成功につながっていると感じています。さらに、

令和8年度には学びの多様化学校として、「古志はるかぜ学園」が開校予定です。教員の人事異動先にも加わる新しいタイプの学校であり、「His School」(ここが私の学校)をスローガンに、不登校経験のある子どもたち一人ひとりに合った教育を提供することを目指します。校長会でもすでに説明を受け、各学校で動画や資料を使った周知が進んでいます。自らの経験や専門性を生かしてこの新たな挑戦に関わりたいという教員の声も多く、富山市の教育の新しい一歩として期待が高まっています。1人1台端末の活用も、学びの多様化に欠かせません。授業では調べ学習や発表、意見交換などに幅広く活用されていますが、さらに研究や工夫を重ねる余地があります。また、教育相談システムやメタバースを活用した不登校支援など、ICTを生かしたサポートルームも令和5年度から順次導入され

ています。社会の変化に迅速に対応する富山市の教育方針を現場がしっかりと支え、保護者・地域に丁寧発信していくことが、私たち管理職の責務であると感じています。

3本目の矢である「保護者や地域との協働」についてです。富山市PTA連絡協議会の皆さまとは、理事会や懇談会を通して常に率直で有意義な意見交換をさせていただいております。特に、部活動の地域移行、いじめ不登校対応、コミュニケーションの運営など、今日的な課題について協働で議論を重ねており、PTA役員の皆さまには、学校現場の実情を真摯に受け止めていただいていると感じています。また、8月の懇談会や9月の教育フォーラムでは、教職員とPTA、教育委員会が一体となり、富山市の教育の根底にある「民主主義の理念」について理解を深めることができました。

こうした積み重ねが信頼関係を築き、教職員の働き方改革や教育活動の充実にもつながっています。

池淵小学校校長 富山市小学校長会を代表して、現場の取組を紹介させていただきます。私たちは「子どもたちの笑顔を真ん中に」を台言葉に、子ども一人ひとりのよさや可能性を伸ばす教育に取り組んでいます。

小学校では、令和5年度から新しい学びの形を意識した授業改善を進めています。特に重視しているのは、子どもが



池淵小学校校長

自分の考えを言葉で伝え、互いの意見を聴き合う時間です。授業の中で「どうしてそう思ったの?」「他の考えもあるかな?」と問いかけることで、子どもたちは自ら学びを広げ、深めようとします。先生が一方的に教えるのではなく、子どもたちが考え合う授業へ。この変化が、子どもたちの表情にも現れています。

教員自身が学び続けることも大切です。各学校では、公開授業や研究会を通じて、授業力の向上を図っています。また、富山市教育センター主催の「校内研修リーダー養成講座」などに参加し、学びの成果を校内に広げる取り組みも進めています。

一方で、教員の多忙化という課題もあります。その中で「子どもと向き合う時間」を確保するために、業務改善やICTの活用を進め、学校全体で支え合う仕組みづくりを行っています。校内サポートルームの設置が進んだことにより、不登校や登校しづりのある子どもたちにも、新しい学びの場が生まれました。

サポートルームでは、子どもたちが「自分のペース」で過ごせる時間を大切にしています。職員やスクールカウンセラー、支援員が連携し、一人ひとりの心に寄り添う支援を行っています。子どもたちの笑顔が少しずつ戻ってくるのが、教職員にとっても大きな励みとなっています。

コミュニケーションの仕組みを活かし、地域の方々やPTAとともに学校づくりを進めています。地域の方々

が授業や行事に協力してくださると、PTAの皆さまが子どもたちの活動を支えてくださること、そのすべてが学校教育を豊かにしています。これからも、「みんな子どもを育てる」体制を大切にしてまいります。

石田富山市PTA連絡協議会会長

私たちPTAは、学校と地域、保護者をつなぐ架け橋として、子どもたちの健やかな成長を支える活動を続けています。近年、共働き家庭の増加などにより、PTA活動の在り方も見直しが求められています。富山市PTA連絡協議会では、「誰もが無理なく参加できるPTA」を目指し、活動内容や組織の見直し、オンライン化を進めています。また、学校や地域の課題を共有しながら、「子どものために何ができるか」を基軸に活動を展開しています。各地区PTAでは、登下校の見守りや清掃活動、防災学習など、地域と連携した活動が盛んに行われています。また、教育委員会・校長会との意見交換会や懇談会では、保護者の視点から学校現場の課題や保護者の思いを伝え、ともに解決策を考える機会を設けています。こうした「協働の場」を通じて、学校と家庭、地域がより良い関係を築くことができています。私たち保護者にとつて、不登校の問題はとても身近な課題です。富山市では、教育委員会や学校が連携し、校内サポートルームや相談体制を整えてくださっています。保護者同士が情報を共有し、孤立せずに支え合えるような場づくりを大切にしています。「一人じゃない」「誰もが受け入れられる学校に」そうした思いを共有しながら、これからも活動を続けていきます。



竹脇中学校校長



ここからは富山市の教育についての深掘りであったり、小中学校の連携教育、またPTAとの連携、悩みを抱える子どもの支援、また教員の働き方と資質向上などについてざっくりぼらんに自由討議という形にさせていただきたいと思えます。

石田 最近、学校を訪問する中でよく感じるのは、「残業時間が減った」という数字だけでは、先生方の負担感や満足度は測れないのではないかと、という点です。特に小学校は大変そうだと感じます。

池淵 実際、小学校では児童の多様化が進み、35人、40人を一人で見るのは厳しくなっています。そこで、ボランティアバンクのようなものを作り、家庭科や工作など、危険を伴う授業には保護

者や地域の方に入ってもらっています。先生にとっても助けになりますし、子どもたちにとっても「いろんな大人の目」があることは大きな安心につながっています。

石田 中央小学校でも、彫刻刀の授業や家庭科などに保護者が関わる取り組みを進めています。ただ一方で、子育てサロンなどを開催しても、毎回同じ保護者の参加が多く、たくさんの方の保護者に聞いていただけないという悩みもあります。だからこそ、学校とPTAが一緒になってもっと学校に興味を持ってもらう仕掛けづくりが必要だと感じています。

池淵 外部の方に入っていたり、情報管理など慎重さも必要ですが、それ以上に得るものは大きいです。また、教員の働き方改革は「早く帰らせる」ことが目的ではありません。子どものために働いた、というやりがいを感じられることが何より大切だと思います。

竹脇 中学校では、行事の精選や部活動改革が進み、教員の業務はかなり整理されてきました。校務支援システムの導入で事務作業も効率化され、時間が生まれています。ただ、その時間は子どもや保護者と向き合うために使わなければ意味がありません。

宮口 授業についても、教師主導から子ども主体へ変わること、準備に追われすぎず、結果的に働き方改革にもつながります。失敗を恐れず、子どもの発言や偶然的な気づきを大切に、授業こそ、教育の本質だと思います。



石田 PTAも「事業ありき」ではなく、「子どもたちのために何が必要か」を軸に見直す時代だと感じています。例えばバザーも、キッチンカーを導入するなど、負担を減らしつつ子どもが楽しめる形に変える工夫ができます。

竹脇 小中学校の連携も重要です。中学校側が小学校の状況を理解し、対応をそろえていくことが欠かせません。限られた時間の中でも、学校と保護者が顔を合わせ、信頼関係を築く機会を大切にしたいですね。

宮口 子どもは大人の姿を見て育ちます。学校だけでなく、家庭や地域も含めて、どんな大人の姿を見せたいのかを共有することが大切です。今日のような対話を重ねながら、学校・家庭・地域が一体となって、よりよい教育環境をつくっていききたいと思います。

本日は貴重なお話をありがとうございました。

子育てサロン(ブロック連携特別委員会)



第1回



第2回



第3回



第4回



第5回



市P連の親学び推進事業として、「子育てサロン」を富山市内5地区で開催しました。各地区で、保護者の関心に沿ったテーマを選定し、講師の先生をお招きしてご講演いただいた後、参加者同士で意見交換を行いました。それぞれの地域ならではの工夫が光る、オリジナリティあふれる子育てサロンとなりました。

学びの場としてだけでなく、保護者同士が交流することで悩みを共有し、新たな気づきを得る機会にもなり、大変有意義な事業となりました。

PTA活動研修会(PTA活動研究委員会)



新旧PTA会長を対象にした「PTA活動研修会」が、2月14日に富山県民会館で行われました。VUCAと言われて久しい昨今、子どもたちを取り巻く環境も大きく変動していますが、同じ立場の会長や会長候補者が課題を共有し、ヒントを与えあうなかで、子どもたちの環境を支えるためにPTAとして何ができるのか、考え合わせることで、たいへん有意義な研修となりました。子どもは未来の希望そのものです。彼らのために大人ができることをする、それがPTAなのだ と再確認できる研修会でした。ご参画、ありがとうございました。

